

平成28年度 第3回グローバル教育推進委員会議事録

【協議事項】

平成28年度テーマ：主体的な学びや協働的な学びをととした学習の在り方について
第3回「到達目標に向けた主体的な学びや協働的な学びによる思考の深まりについて」

- 各研究の取組から見てきた生徒の変容、教師の変容、学校の変容等
- 本音度の成果と課題から次年度に向けた取組について

(1) 高知南中・高等学校における取組

①グローバル教育プログラム（英語教育）について説明・協議

質疑

Q. 資料に「教員の意識調査によると『授業改善の意識が高まった』と回答した教員は100%」とあるが、具体的にどのような部分の意識が高まったのか。

A. 目標達成を意識した言語活動を設定することや、CAN-DO リストを基に指導していくことの意識が高まった。また、授業を実施することだけを考えるのではなく、どのように評価していくのかを教科会で話すようになった。その方法を探るために以前に増して、学習指導要領を熟読し、生徒にどのような力を付けるかを意識するようになった。

Q. 生徒の意識調査では、高校2年時に比べ高校3年時では、「英語を書くことが好き」と回答した割合が増加しているが、具体的にどのような授業を実施し、この結果につながっているのか。

A. 例えば与えられた4コマ漫画からストーリーを考え書く活動では、生徒は体験からストーリーを考え、それを相手に伝えるためにさらに工夫していた。このことにより、英文を書くことを楽しみ、英文が書けるようになってきたと聞いている。また、書いたあと全体で発表もさせるという活動を何回か繰り返すことにより、よい人間関係も構築されてきたそうである。

また、対話文の中の空所となっている1文を、語句を並べ替えて適切な英文にするという学習では、その場面の状況から考えるグループやその語句から文法事項を予想するグループなど、それぞれの工夫があり、思考を共有することで学び合いが生まれている。

協議・まとめ

- ・初年度からの取組を見ると、教員、生徒がずいぶん変容したことがわかる。
- ・継続、発展していくためにも、教科会を従来のあり方（事務的な報告、相談）ではなく、授業の中身を検討する「学びの場」としてほしい。
- ・教科会を教員の「アクティブ・ラーニングの場」にしていきたい。
- ・生徒に力が付き始めていることを実感した。
- ・中高一貫校（6年間）の英語の場合、政府が提案している2,000時間から2,500時間の時間を確保するには、1,200時間から1,700時間が不足している。

- ・ 1週間に5時間、学校外（家庭）で学習するようなしかけが必要になる。
 - ・ 実施しやすい方法は「読む」、「書く」。タブレットがあれば「聞く」ことも可能。
 - ・ 生徒とどう向き合うかを設計すると、現実的なゴールが見えやすい。
- ・ パフォーマンス評価では、生徒の伸びにセンシティブなルーブリックを作成すること。
 - ・ 定着させたい部分を確認し、次年度の定期テストを今から作成すること。（そうすると、授業内容も定まってくる）
 - ・ 教科会の時間を確保すること。内容を精選すること。
 - ・ 「縦持ち」の内容なども含めた新たな教科会のあり方を検討してほしい。
 - ・ 実践している取組を先駆的に進めてほしい。

（２）高知南中・高等学校における取組

②グローバル教育プログラム（探究型学習）について説明・協議

質疑

Q. 高知南で実施している探究型学習は、一斉授業からアクティブ・ラーニング型授業に変えていこうとするものなのか。または、生徒がテーマを見つけ自分自身で深めて学んでいくことも含まれているのか。

A. 本校ではキャリア教育の中で、プロジェクト型のマネジメント学習に取り組んでいる。高校1年生から始め、高校2年生の12月に発表会がある。テーマは「高知県の課題解決」という枠組みの中で、各グループが研究を深め、高校生として提案ができるように学習を進めている。

Q. それは、各教科で実践している探究型学習との関わりはあるのか。

A. 教科との連携や総合的な学習の時間を通して関わっている。

協議・まとめ

- ・ 指導法の工夫、まとめ方の工夫など素晴らしい取組がされている。
- ・ 探究型の学習こそ教科につながりをもたせ、概念を共有すると、今後のキャリア学習の深まりにもつながる。
- ・ この力が育成されると、卒業後の社会でも活用できるものになると思う。
- ・ アンケート結果に、ジグソー法を用いることで理科の実験以外の授業で「自分とは違うものの見方、考え方が聞けてわくわくする」という感想が出ていることが興味深い。
- ・ 課題は、授業スタイルがパターン化してくると生徒は飽きてくる（マンネリ化）。
- ・ 中学生（または他学年）の授業に、高校生がファシリテーターとして参画すると学びを活用する場になる。
- ・ 責任感が持て、学びが深まる要素につながる。（主体的で対話的にもなる）
- ・ 思考の深まりの場面を設定することは大変だが、生徒の変容は大きい。
- ・ アクティブ・ラーニングの学び方について、一定の方向性が見えてきた。
- ・ 高知南の取組が汎用的なものになると、県下全体に普及していけると思う。

- ・次年度は新たな開発、研究に取り組むのではなく、日常的で、組織的、継続的な取組となるような授業改善に移行してほしい。
- ・本県のリーダー校としての提案をしていただきたい。

(高知南)

- ・中学生の授業に高校生がファシリテーターとして参画する授業は、本校でも国際科の授業の中で実施している。
- ・中学生の1日体験入学では、高校生が理科の実験の授業と一緒に手伝いをしていく。(いただいたご意見も参考にし、さらに改善していく)
- ・教科会のあり方は、本事業を通して変わってきたと感じている。
- ・次のステップに進むために、管理職がリーダーシップをとり全体の方向性を示す。
- ・中堅的なリーダーが教科会等で活躍すると教科全体の取組が変わってくると実感している。
- ・改善のための見える化が、学校内で進んできた。
例えば、公開授業では、一部しか参観できない人は、付箋で気付いた部分を残していく。それをまとめて、次回の改善につなげるなど組織的な取組に変わり、教員が変わり始めてきた。
- ・「教科横断的な取組」、「概念の共有」については、次年度のこの会で、報告できるように取り組んでいきたい。

(3) 高知西高等学校における取組 スーパーグローバルハイスクール事業について説明・協議

質疑

Q. グローバル探究Ⅱの研究論文のボリュームはどのくらいか。

A. A4サイズ8枚以内、約5,000字である。

Q. 研究論文作成までに、文章を書くというトレーニングをどれだけ実施してきたか。

A. 昨年は、クリエイティブシンキングの部分を伸ばすことに重点を置いていたため、クリティカルな面が不足していた。5～6人で1つのテーマについて論文を仕上げる形式で、書き方は、他県(堀川高校)で使用しているものを活用している。

Q. 成果報告会では、発表する生徒にフィードバックがあると思うが、残りの生徒へのフィードバックは、いつ、どのように行うのか。

A. クラスの担任からのフィードバックはしているが、評価も含めたフィードバックは、できていない。現在、SGH運営指導委員から助言をいただくことを検討中である。

協議・まとめ

- ・これまで高校で論文作成の指導はなかったと思うので、教員の負担は大きいだろう。
- ・各教科のSGH化については、研究論文のテーマ設定との関わりを持たせること。
「方法先行の授業となっており、目標設定が不明瞭」ということが解消されるのではないか。
- ・教員が自分の教科の延長線上に「グローバル」を意識すると道筋を作りやすい。
- ・「英語＝グローバル」ではないということを意識する。
- ・次年度はSGHに関わる生徒が3学年揃うので、縦ラインを築いてほしい。例えば、1年生の授業に3年生がサポートで入ることも可能ではないか。3年生になった時のグローバルリーダーが自分の学年しか見ていないということのないようにしていただきたい。
- ・ファシリテーターとしての役割、場面を設定することで、生徒が達成感を実感しやすいと思う。(学年間での協働的な学習の場を設定してはどうか)
- ・前回のこの会議で、IB校でSGH指定を受けている学校の例として、中間評価でそれが反映されていないと指摘を受けた話をしたが、高知西高校ではATL (Approach to Learning: 学習スキル、学習の姿勢) のスキルを取り入れていただいていたので、良かった。
- ・「概念の設定」を取り入れると、さらに良くなると思う。
- ・論文は、まずは日本語で書ける指導をするなど、書き方を教えること。
- ・多読の結果は、すぐに出ないが、多読した部分を分析させたり、要約させたりすると良い。
- ・「～を学ぶ」ではなく、「～で学ぶ」を意識して指導していただきたい。(概念の設定)
- ・生徒が達成感を得られる課題になっているか。
- ・生徒の伸びしろと与えられている課題が合っているか。実績ができてきたので、このあたりの検証を試みてはどうか。
- ・論文作成に関してのオリエンテーションは大事なことであるが、形式的なことを教えるだけでなく、なぜ書くのか、書きたいことをまとめるには何が必要かを理解させることが大事。
- ・論文作成について、噛み砕いて生徒に説明できるような力が教員に必要。(マニュアルにそった説明で終わらないように)
- ・探究や検索で日本語サイトを使用することはディスカッションでも、同様のことが言える。日本語を使用した後に、段階として英語を活用できるようにしていくと良い。
- ・多読は、量を読むことも大事であるが、1冊の本を深く読み込むことも必要である。
(量+読むことの豊かさ、楽しさにつながるように)
- ・本県(高知西)から、堀川高校へ派遣されている教員がいる。他校の良い取組は高知で広げていただきたい。
- ・教員の負担を少なくするためにも、SGH運営指導委員等の外部の力を借りながら、ぜひ全員の生徒へのフィードバックをお願いしたい。
- ・いただいたご意見は、今年度中に整理をし、次年度のPDCAサイクルをすぐ回せるように。(残りの2ヶ月で整理をするように)

(4) 国際バカロレアの導入に向けた取組 効果的なカリキュラムの検討について説明・協議等

質疑

Q. 次年度は、どのように準備を進めていくのか。

A. 新しい取組をなぜやるのか、何のためにやるのか、どのようにやるのかを新しい学校に広げていく取組とする。

協議・まとめ

- ・高知の取組は、日本の公教育のモデルケースとなると言われている。
- ・高知は学習指導案の作成、指導法、学び方について、より有効な日本型教育との融合を編み出している。
- ・壮大なプロジェクトの中に、皆さんは関わっている。
- ・D Pの課程に進む生徒だけでなく、全校生徒に対してE EやT O Kを学ぶ機会を与えることは、すばらしい。
- ・日本の高い教育力に、日本独自の特別活動で育成される力、さらにI B教育で培われる力が加わると、高知から海外に教育のモデルを発信できるのではないか。
- ・I B導入に向けて取り組んでいることは、高知県の教育の転換期になるのではないか。
- ・高知南で成果を上げていること、高知西で成果を上げていることが、新たな学校の礎になるようにしていただきたい。
- ・広報については、保護者がI Bの学習者像を理解することが重要。
- ・教育は学校現場だけで築き上げるものではないということを、発信し続けること。これは学校の変革だけでなく、高知の家族の在り様にも関わってくることになる。
- ・保護者を含めた体験セミナーを開催することで、家庭と学校と地域社会を含めて成長していけるのではないか。
- ・地域社会は「グローバル」と接点を持ちやすいが、保護者は家庭とグローバルが結び付くことに、まだピンときていない。
- ・グローバル社会を築くために保護者もメンバーに入っているという意識づけをさせることが大事（広報活動は意義があると思う）

本会のまとめ

- ・国際バカロレアの全体像が明確になってきた。
- ・高知南の英語教育や探究型学習、高知西のS G Hも成果が見え始めた。
- ・グローバル教育推進委員会は、高知南と高知西の両校が統合し新しい学校を作るにあたり、それぞれの良いイメージを高めて融合しようという目的がある。
- ・次年度は両校が融合し、連携を取りながら何ができるかといったことを課題としてあげていただく会にしていきたい。